

講演会開催報告

以下は杉村楚人冠記念館の企画展「楚人冠と漱石 ～新聞と文学と」にあわせて開催した杉村楚人冠記念館・我孫子市民図書館共催連続講演会の要旨である。要旨の作成は杉村楚人冠記念館で行った。

連続講演会「没後百年 夏目漱石を語る」1日目

有山 輝雄 氏（メディア史研究者）「明治末期の新聞メディアと漱石」

平成 28 年 12 月 3 日（土曜日）生涯学習センター アビスタ ホール

新聞小説作家夏目漱石 明治末期の新聞企業化のなかで

現在我々が親しんでいる漱石の小説の多くは朝日新聞に連載されていたものである。こういうものを連載として読んでいた明治の新聞読者とは何だろう、新聞社がなぜ高名な人物を社員として招いたのだろうか。漱石は主筆より高い給料をもらっている。小説家として夏目漱石ほど厚遇された人物はいない。彼はなぜ大学教授の地位を捨てて社員となったのか、朝日新聞はなぜそこまでして漱石を社員にしたのか。そこに明治末期の新聞のあり方を考える大きな問題がある。漱石が新聞の歴史の中で果たした役割は大きい。

漱石から見れば、大学の世界の煩わしさから自由になって自分の小説が書けるという期待があり、新聞社側から見ると、新聞が大きく変わろうとしている時期に漱石のような人物に小説を書いてもらうことに大きな意味があった。小説はメディアに載らなければならない。しかし、当時は小説家がメディアを探すのは大変なことであった。本や雑誌はそんなに売れない、メディアとして大きな部数を持っているのは新聞だけ、そこがポイントである。

初期の新聞は、フィクションとノンフィクションの間のような「続き物」を載せて街のできごとを報じる振り仮名・挿絵つきの「小新聞」と、第1面に政治的な論文を掲げ漢文調の難しい文章で書かれた「大新聞」の両極端な新聞に分かれていた。その「小新聞」と「大新聞」とが段々と「中新聞」になって企業化していくのが明治の中期から末期である。

転機になるのは日露戦争である。この時期に新聞社が読者を獲得するために大事なものは速報であった。そのためにはたくさんの記者と通信網が必要、つまりは設備投資の問題になる。しかも戦争が終わると、一旦膨脹した新聞が縮小することはできず、さらに設備投資をし、新しい新聞を作らなければならない。このころ、広告の普及、販売店網の形成、輪転機や写真印刷の導入といったことが起き、新聞を企業として大きくしようという経営者が出現する。

社会的な背景としては、東京という都市の人口が増えていったことがある。東京やその周辺に生まれた工場に集まった労働者と、東京の学校で学んで立身出世をしたいという書生である。新しい生活スタイルを持った人たちを新たな読者にしていくには、こうした人たちを楽しませる小説も載せていかなければならない、その先端に立ったのが企業的に成功した朝日新聞であった。

小新聞として創刊された朝日新聞は営業的には成功していたが、社会的な評価が決定的に欠けていた。社会的な評価を高め小新聞から脱却しなければならない、これを大新聞の『日本』出身で朝日に入った池辺三山いけべさんざんがリードしていく。その時に欧米の新聞を見聞して来て指導的な役割を果たしたのが杉村楚人冠である。「ジャーナ



リストティック」、楚人冠は訳して新聞眼といった、こういうものを持った記者たちを育てなければならぬと考えた。また、この時期に朝日新聞社は楚人冠の企画した世界一周会をはじめとして様々なイベントを作っていく。つまり都会に暮らす人たちの生活感覚や関心のあつたものを新聞社が作り出していった。こういうなかで、新聞小説も新しいものを作らなければならぬ。

そのために、朝日新聞は夏目漱石のような名声のある人物を必要としていた。漱石は入社にあたり、池辺に加え社主の村山龍平むらやまひさしげが保障してくれるかということ、営業から苦情が出ていいか、ということを確認している。実は池辺は新聞小説は小説の発達を妨げるかもしれない、新聞は小説にとって悪魔であるとまで言っている。それを頼むのは矛盾していることを十分に理解して、漱石の要望に応え社主による身分保障と営業部からの苦情を押さえることを約束したのである。こういう人物が間にいたのは漱石にとって幸運であった。

当時小説家は収入が得られる職業ではなかった。その時代に漱石は新聞社で安定した収入を得て書き続けることができた。それは朝日新聞が経営的には余裕があつて、一方社会的評価が得られていない、という明治末期の状況のために可能であった。元帝国大学講師という肩書を持った漱石が入社して小説を書いている、自分たちは他の新聞より文学水準の高い小説が載つた一つ上の新聞なんだということを誇示する必要が朝日新聞にはあつた。

「三四郎」などは典型的に大学に入るため上京してきた青年を描いた小説である。大学や学校で学ぶ人たちが求めた新しい知的水準のものを漱石は書いた。また社会面の一角に文芸欄を作り、自分の弟子や教え子たちに執筆の機会を与えて新しいものを作つていった。さらに朝日にとって重要だつたものに巡回講演会がある。これは一種の販売活動であるが、漱石はそれも分かつて盛んに協力した。

こうして、新聞小説家として漱石は非常に成功した。朝日の好待遇により、安定した生活と書く自由を得て、新聞に連載することによって作品を多くの読者に伝えることができたか

らである。漱石の名前が我々の中に浸透しているのは新聞小説家だからである。漱石によって部数が伸びたかどうかは分からないが、朝日新聞からすれば小新聞から脱却することができ、お互いにプラスにすることができた。漱石の小説が当時上昇期にあったメディアに載ったということが重要である。もう少し後になると、朝日新聞も小説家を社員に迎え入れることはなくなり、小説家が漱石のように活躍する余地は少なくなる。漱石はその時代を見ることなく亡くなった。あらためて、新聞の上昇期に漱石が入社し新聞小説を書いたことが、新聞の歴史に残した足跡の大切さが分かる。

連続講演会「没後百年 夏目漱石を語る」2日目

石崎 等 氏（立教大学名誉教授）「漱石と杉村楚人冠」

平成28年12月4日（土曜日）生涯学習センター アビスタ ホール

私が我孫子に來たのはこれで4度目、平成22年11月、白樺文学館で開催された「針文字書簡と大逆事件展」が最初だった。菅野スガから杉村楚人冠に送られたとされる針文字書簡に興味があったからである。針文字書簡は獄中にある人間が、看守の目を盗んで針で穴をあけて手紙を書き、何らかの方法で外部へ持ち出したものである。刑が確定すると外部と連絡が取れるようになるが、展示品はその前に緊急に作成されたものである。この針文字書簡、楚人冠の生涯、漱石と楚人冠の関係については、教育委員会から出ている解説書や、小林康達氏の『楚人冠 杉村広太郎伝』（現代書館）などによって、アウトラインはわかっている。しかし視点をずらしてみれば、まだまだ新しいことがわかってくるだろう。

漱石は五男、楚人冠は長男として生を享けた。当時の家父長制の中では五男と長男では大変な差がある。夏目家は長男・次男が早逝したために、三男が家督を相続するが、漱石には一銭も渡されていない。漱石は養子に出され、二十歳の時に金で実家に戻る。父も母も二人いるという、そういう苦勞をしている。一方、楚人冠は長男ではあるが、早くに父を亡くして大変苦勞している。母子家庭で世間的な屈辱を味わった、そのことが彼を温和な社会主義者にした。漱石は抜群の才知で帝国大学文科大学を卒業する。一方、楚人冠はストライキをして和歌山中学を退学している。これは和歌山の気風なのか、新宮出身の佐藤春夫もストライキをして、卒業のかたちをとったものの学校を追われている。そして上京する。楚人冠は英吉利法律学校、国民英学会で学ぶ。国費で教育を受けた漱石とは対照的なところである。

二人はともに、イギリスの文化的な教養を身に着けたイギリス紳士とっていいであろう。ただし、漱石はイギリス嫌いであった。けれども、イギリスにいた二年のうちにイギリスのいいところを身に着けている。楚人冠のイギリス滞在は漫遊的でした地理感覚で漱石よりも広い見識を身に着けた。そして、二人ともイギリスのジャーナリズムや出版の仕組みに通じていた。漱石は著作権問題に詳しく、原稿の買取りから印税制へ、出版の近代化を自ら

実践している。

明治40年4月、漱石の東京朝日新聞入社によって、二人は同僚となった。楚人冠は雑誌『自由文壇』のアンケートに「文芸の士が今少しジョーナリズムを理解し、ジョーナリストが今少し文芸を理解せんことを望む」と答えている。漱石は文芸の士であり、楚人冠はジャーナリストである。漱石が社



会面の一角をもらって、門下生の森田草平・小宮豊隆を助手にして「文芸欄」を創設すると、社内では、記者でもない人間が出入りしているという気持ちもあって波風が立った。親しくなった楚人冠と漱石の仲を裂こうとした輩もいたようで、それを修復するために、漱石が門下生の野上豊一郎に頼んで噂を取り消してほしいと依頼した手紙がある。野上はこれと同じ内容を『国民新聞』の「風聞録」欄に書いた。

二人は青春期に、鎌倉の円覚寺に約半年間の時間差で参禅している。師から与えられた公案（課題）を通過することを〈通過〉^{とお}というが、漱石は〈通過〉^{とお}らず、楚人冠は〈通過〉^{とお}った、その違いは何だったか。漱石の場合、「父母未生以前本来の面目とは何ぞや」、つまりまだ両親が存在しない混沌とした無の世界で、お前の面魂^{ぶもみしょう}は一体何なんだ、という難解な公案に答えられなかった。『門』という小説の最後近く、宗助という人物の参禅体験にそれが少しデフォルメされた形で出ている。心の動揺を感じ、非常に切実な課題を持った主人公に、老師から「父母未生以前」云々の同様の公案が出されるが、宗助は満足に答えられない。『門』では、どう答えたについては一切触れられていない。養子に出されて苦労し、父と母の大きな問題を抱えた漱石には、非常に残酷な問いだったかもしれない。漱石はイギリス経験主義流の合理的な哲学を学んでいる。だから、人間の心に対して、なぜこうなったのかと理詰めを考えていく。しかし禅はそういうものではないから、合わなかったと思う。しかし、合わない漱石が作品のあちこちに禅的なものを散りばめ、随筆や評論で言及し、最後までこだわったのは興味深い。

一方、楚人冠に出された公案は分からないが、彼は〈通過〉^{とお}って無懷居士^{むかいこじ}という号をもらっている。彼の人生観は、キリスト教的なものもありつつ、かなり禅から来ていると思う。大切な子どもを幾人も亡くしても、それを表立って出さなかったことは、宗教的な何かがないと難しいのではないか。

昭和2年、『うるさき人々』という、楚人冠の円熟期に『東京朝日新聞』に連載したエッセ

セイ風長篇小説がある。機知と警句による文明批評の趣をもった作品である。主な舞台はデフォルメされているが、我孫子である。冒頭の場面は鎌倉円覚寺らしい。作中には禅問答のようなことも書かれているし、漱石の小説からエピソードを拝借した部分もある。例えば、芸者の女性が学生から聞いたニル・アドミラリという言葉、うろ覚えで「エル・アミダブツ」とか何とかとぼけて言う。ニル・アドミラリは『それから』の長井代助を評した言葉である。どんなことに直面しても冷静でいられる、という意味のラテン語である。

『うるさき人々』では色々なことが起きるが、主人公の大沢大休という和尚が、世間のうるさい連中から逃れ、京都の自坊に帰ってお茶をすすりながら「ええ天気じゃなあ」とつぶやく場面で終わる。漱石の小説の深刻さと対照的に、ドタバタ劇で、実に明るく、ユーモラスで、カラッとしている。禅の小説といってもいい。同じ文明批評を意図しても、漱石は小説家、楚人冠はジャーナリスト、エッセイストなのだと思う。

明治42年6月、楚人冠は社会主義者の幸徳^{こうとくしゅうすい}秋水を訪ねたルポ「幸徳秋水を襲ふ」を書いた。この少し前の5月に、新聞紙法という厳しい法律ができています。楚人冠にとってこの記事は、新聞紙法への挑戦だったのではないかと。こういう記事に対して内務省の検閲は、どう反応するのか、どこまで書けるのか書けないのか、ある種の踏み絵だったであろう。それを漱石が、3か月後『それから』第78回に取り込む。大阪で銀行マンとして失敗した平岡が東京に舞い戻る。そして代助は、かつて本当は好きだったが、平岡にあっせんした三千代と、愛を復活させようとする。その代助と、新聞記者になり、もう妻に関心のない平岡が、待合で対面する場面の会話の中にこの記事を使ったのである。近代文学の中で、幸徳秋水という名前が堂々と天下の大新聞の小説に登場するのはこれだけ、秋水を訪ねて刺激的なルポにしたのも、楚人冠のこの記事だけである。大逆事件の前夜に、二人は急接近して、親しみを増したのであった。